

SHOW HEY シネマルーム

★★★

母の残像

2015年・ノルウェー、フランス、デンマーク、アメリカ合作映画
配給/ミッドシップ・109分

2016 (平成28) 年 12 月 11 日鑑賞

テアトル梅田

Data

監督：ヨアキム・トリアー

出演：ガブリエル・バーン/ジェシー・アイゼンバーグ/イザベル・ユペール/デヴィン・ドルイド/ルビー・ジェアリンズ/メーガン・ケッチ/デヴィッド・ストラザーン/エイミー・ライアン

■ショートコメント■

◆報道写真家（戦争写真家）は男性でも命をかけた仕事だから、女性はずっと大変。さらに報道写真家として自爆テロ犯に密着する女性を妻や母に持つ夫や子供たちも大変だ。そのことは『おやすみなさいを言いたくて』（13年）を観てよくわかったが、同作における家族崩壊の危機を前にした報道写真家レベッカの最終決断は如何に？

私は同作に星5つをつけたが、そんなスリリングな同作（『シネマルーム35』220頁参照）に比べて、さて本作の出来は？

◆本作は、レベッカと同じく報道写真家として活躍した女性イザベル（イザベル・ユペール）死亡の3年後に開催される回顧展に、長男のジョナ（ジェシー・アイゼンバーグ）が、父ジーン（ガブリエル・バーン）と引きこもりがちな次男コンラッド（デヴィン・ドルイド）が暮らす実家に戻ってくるシークエンスから始まる。

戦争写真家が戦地で死亡すれば大ニュースになるし、きっと多額の保険金も出るはずだが、イザベルの死亡は帰国後の平和な国における交通事故によるものだったから、ニュースにもならないし、きっと死亡保険金も一般の基準。しかも、この事故がスクリーン上で見るようにイザベルの居眠りによる対向車線への進入なら過失相殺によって保険金は大幅に減額されるはず。さらに万一「自殺」なら保険金はゼロ・・・？

そんな弁護士としての私の興味はよそに、本作は「あの事故」以来取り残されてしまった3人の男たちのぎくしゃくした関係を執拗に描いていく。したがって、『母の残像』という邦題がいかにもピッタリだが、いささかうっとうしさが鼻につくことに。

◆本作を監督したヨアキム・トリアーは有名なラース・フォン・トリアーを叔父に持つノルウェーの精鋭で、「カンヌを震わせた北政の閃光！」らしい。本作では回想シーンで登場するイザベルのたくましさが目立つ反面、①優しいだけが取り柄の夫ジーン、②赤ちゃんが生まれた直後にもかかわらず、何となく妻や赤ちゃんとの距離感がつかめない長男ジョ

ナ、そして③3年前の母親の交通事故の「真相」を知らないまま母親への思いを断ち切れず、現実に全然対応できない次男コンラッドという3人の男たちの「か弱さ」が目立つ。

中盤から後半にかけては自分の部屋に閉じこもってゲームばかりしているコンラッドの姿が強調され、また彼が一方的に思いを寄せるガールフレンド(?)のメラニー(ルビー・ジェアリンズ)へのアプローチ(?)の姿が描かれるが、これにもかなりイライラさせられる。デンマークの鬼オラース・フォン・トリアーの遺伝子を受け継ぐヨアキム・トリアーの精神はよほど繊細だから、妻や母を亡くしたショックから容易に立ち直れない3人の男たちの心情がよくわかり、それをスクリーン上に描きたかったのだろうが、私にはいささかうんざり・・・。

◆有名な報道写真家だった妻や母が突然死んでしまうと、残されたフィルムを中心とする資料の整理が大変。しかし、友人リチャード(デヴィッド・ストラザーン)の世話によって近々イザベルの回顧展が開催される以上その準備が必要だし、リチャードはそこでイザベル死亡の真相(交通事故ではなく自殺?)を語るべしと考えているらしい。それならそれでしっかりビジネスライクな打ち合わせをすればいいのだが、リチャードとジーンとの話し合いを見ているとそれがあいまいだし、そのことを父親のジーンが次男のコンラッドに相談しようとしてもコンラッドは話し合い自体を拒否したまま。また、せっかく長男ジョンが実家に戻り長期滞在をしているのに、回顧展に向けた具体的な打ち合わせは先延ばしのままだ。

私の目には、本作に登場する男たちはリチャードも含めてみんなダメ男ばかりと言わざるをえない。ところが、ヨアキム・トリアー監督はそんなダメ男たちに対してあくまで優しい視線で暖かく接していく。そんなストーリー展開の中で、実はリチャードとイザベルとの間は「ヤバイ関係」だったらしいことがジーンにわかってくると、がぜんイザベルが「魔性の女」に見えてくることになり、ストーリーが大きく「転調」していくかに思えたが・・・。

◆彗星の如く登場したジェームズ・ディーンは、主演した『エデンの東』(55年)で、優秀な双子の兄弟アロンと対立しかつ父親から疎んじられているひねくれ者(?)の次男キヤル役を繊細に演じたが、最後には死の床につく父親との和解のシーンが感動的だった。それと同じように本作でも、一方でガールフレンドのメラニーとのきわどいシーンの中で「女の何たるか」を覚り(?)、他方で母親の死亡の真相を新聞記事で読む中で、やっと真正面から現実に向き合うことができた次男のコンラッドと父親との和解のシーンが登場する。

しかし、残念ながら私には、その説得力は不十分。ネット上の感想では「コンラッド役のデヴィン・ドルイドは思春期の危うさと成長をみずみずしく演じ、演技派の共演者の中にあって一番の存在感でした」と書かれているものもあるが、私にはイマイチ。ジェームズ・ディーンの繊細な演技に比べると、とてとても・・・。結局、本作は私には最後まで消化不良だったが、さてあなたは・・・?

2016 (平成28) 年12月13日記